

ポームはフランス語で「手のひら」のことで、ボールを手のひらで打ち合う遊びであったことから、「ジュ・ドウ・ポーム」(意味は「手のひらのゲーム」)と呼ばれました。ポームは、12世紀の中ごろ、北フランスの修道院^{しゅうどういん}で考え出されたものだと言われています。

修道院とは、キリスト教で修行をし、出世を夢見る若者たちがヨーロッパの各地から集まってきて、集団生活を送り、修行する所のことです。どうして修道院でポームが始まったのかと言うことですが、ドイツで書かれたもっとも信頼できるテニスの歴史書に次のような話がのっています。



修道院の中庭の風景—この中庭で考えられたボールゲームが、ジュドウポームであり、やがてテニスになっていった。

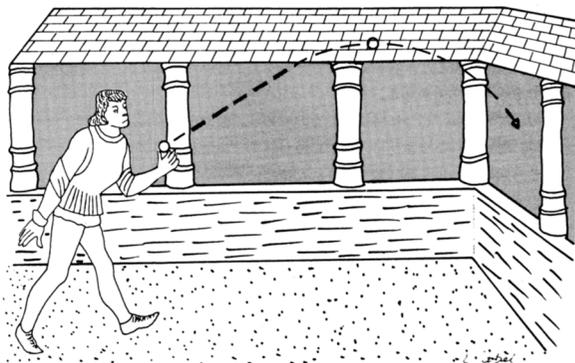
「ある修道士が熱におかされ、生と死の間をさまよっています。そのとき、かれの魂は地獄^{じごく}にさそわれてゆき、悪魔^{あくま}たちのおもちゃにされてしまいます。悪魔たちは地獄の谷間をはさんで2列にきちんとならんで向かい合って立っています。悪魔たちはかれの魂^{たましい}をボールに見立てて、おたがいに、手のひらで打ち合います。『悪魔のつめは鉄よりもかたく、わたしの魂はいたくて仕方がなかった。この時、悪魔たちが行っていたゲームは、日ごろ、修道院で行われているボール遊びよりもきっちりまとめられていた。』とかれは、語ります。この時の印象をもとにして、自分たちのボール遊びを改良して、『ジュ・ドウ・ポーム』をつくっていった。」

この話は、信用するには難しい所ですが、少なくとも12世紀中ごろには「手のひら」でボールを打ち合うゲームが修道院で行われていたということの証明になる話と言えます。

さて、フランスでは11世紀以前にも、ボールをかべに打ちつけ、はね返ってくるボールを交互に打ち合ったり、ボールを屋根に打ち上げて、ころがって落ちてくるボールをたがいに打ち合ったりする遊びが行われていました。

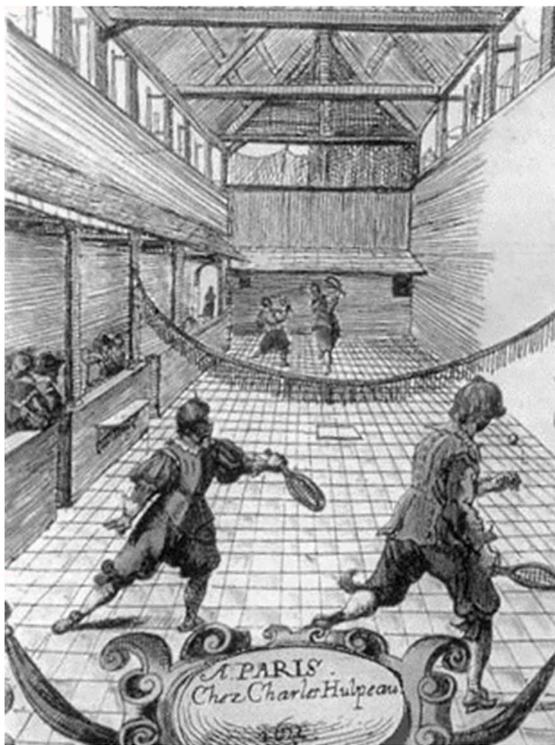


それが、11世紀になると、修道院では、中庭(COURT=コート)や室内にネットをはって、手のひらやグローブなどを持って、ボールを打ち合うようになります。



修道院で始まったポームは、またたく間に、教会、国王、貴族の間に広まります。特に、フランスの歴代の王が熱心にポームを楽しんでいたことから、ポームは「王様のスポーツ」として広く知られるようになります。

ポームは修道院しゅうどういんの中庭で行われたことから、今のコートとはずいぶんちがっています。片側は壁、もう一方は、コートに対して回廊かいろうがあります。その回廊のひさしが、コートにはりだすように出ている、それを、柱がささえているという具合です。今とはちがい、これらの壁も回廊のひさしも、全部コートとして使われていました。ひさしにボールを投げ入れて、ゲームが始まります。落ちてきたボールを打ち返し、ラリーは壁もひさしも全部使って続けられました。



ポームが広まるとともに、ポーム専用の球戯館がつくられます。この球戯館にも、修道院でポームが行われていた時のイメージがそのまま使われていて、壁、回廊も設けられていました。

16世紀から19世紀にかけては、ポームの全盛時代でした。これは、ラケットの改良と大いに関係があります。1555年、ガット(羊の腸)をあんだ長い柄のついたラケットが登場します。ガットのラケットの使用により、より遠くへ、より正確にボールを打ち返すことができたのです。ポームの広まりとともに、今までいろいろなやり方で行われてきたポームを、統一したルールで行おうという動きも見られました。

ポームは、海外へも伝わり、イギリスではポームを「リアル・テニス」とよばれ行われるようになります。